



飯田市
歴研ニュース

News Letter
No. 93
The Iida City Institute
of Historical Research

2018年4月3日 発行

飯田市歴史研究所
〒395-0803
長野県飯田市鼎下山538
TEL 0265-53-4670
FAX 0265-21-1173
E-mail iihir@city.iida.nagano.jp



飯田市歴史研究所 平成30年度の事業概要

1. 調査研究事業

歴史資料（史料）の現状記録調査、歴史的建造物調査、聞き取り調査（オーラルヒストリー）などを実施し、地域の歴史・文化を解明していきます。市民や研究者、大学等の研究機関と協働しながら、その成果を研究会・年報等で公表していきます。



2017年7月30日
第15回飯田市地域史研究会

① 研究成果の公表（刊行物）

『飯田市歴史研究所 年報』16号

② 第16回 飯田市地域史研究会

開催時期：8月25日（土）・26日（日）

テーマ：「山里社会の歴史と暮らし」

内容：近世～近代の飯田・下伊那における山里社会（山間部村落）がどのようにして在立していたのか、飯田城下町などとの結びつきを含めて考えます。

③ 歴史研究活動助成

飯田・下伊那を対象にした研究活動を助成することで、人材の育成に努め、研究成果の蓄積を図り、その成果を地域に還元していきます。

④ 定例研究会

⑤ 史料調査及び受入史料の整理、目録公開

⑥ 地域の文化遺産記録作成・調査研究事業、地域資源活用助成事業

史料の調査研究と保存・利活用によって、歴史的地域資源に対する住民意識を高めながら、まちづくりや世代交流の素材としても再認識できる環境を整えていきます。

2. 学習協働事業

さまざまな学びの機会を提供し、市民のみなさんが暮らしている地域を知り、地域を誇りに思う心を培い、人材を育む地域の力を高めていきます。併せて調査研究や教育を行う人材の育成を目指します。史料調査や古文書解説、研究などを地域の研究団体と協働して行います。

① 地域史講座の開催

飯田・下伊那の歴史を題材とした最新の地域史研究の成果について発表します。

② 飯田アカデミアの開催

歴史学を中心とした外部の講師による大学専門課程レベルの学術講座を開催します。



飯田アカデミア第81講座
「イタリア・トスカーナ
丘陵都市シエナの歴史と景観」

③ 飯田歴研ゼミナールの開催

近現代史ゼミ、満洲移民研究ゼミ、地域史（川路）ゼミ、わが町の建築史ゼミ、自分史ワークショップ、思想史ワークショップを開催します。

④ 学校教育や民間の研究グループ等との連携

「職場体験学習」の受け入れや、学校・地域の団体・サークルを対象にした「出前講座」の出講をします。

⑤ 市民研究員の研究活動指導・支援



中学生職場体験学習「ふすまがし」



満洲移民研究ゼミ

3. 市誌編さん事業

歴史研究所の調査研究活動の成果を集約・公開し、この地域の歴史と文化を身近に感じられる取り組みを行ないます。

4. アーカイブズ保存活用事業

地域で育まれてきた歴史・文化の記録は、市民のみなさんにとってかけがえのない貴重な財産であるという観点から、地域に残るアーカイブズ（地域史料）を収集・保存・公開し、市民や研究者が積極的に活用できる体制・環境を整えます。

① 旧役場文書や学校など公的機関の地域史料の保存・公開・活用

② 市役所の非現用文書の保存

③ 地域史料の保存（デジタル化を含む）・継承の支援および公開

5. 地域に開かれた研究所をめざして

市民のみなさんからのご意見をふまえながら、計画的な調査研究活動を展開していきます。

歴史研究所協議会を開催して、市民のみなさんと連携した事業の推進を図ります。

調査研究によって整理蓄積された収蔵史料や目録などの情報は積極的に公開を進め、市民のみなさんや研究者等の閲覧や利用に関するサービスを提供します。

さらに、ホームページの充実や広報などを通じ、歴史研究所の諸活動を広く市民のみなさんに紹介していきます。

また、情報誌「歴研ニュース」を年6回発行します。

平成29年度研究活動助成報告会が開催されました

2月24日、飯田市歴史研究所にて行われた助成報告会をご紹介します。

「ミチューリン会機関紙に見る農業技術運動の展開と変容」 壬生 雅穂

戦後、種子を冷蔵処理して増収をはかるヤロビ農法(ミチューリン農法)が、下伊那を拠点として流行しました。本研究は、菊池謙一が組織した下伊那ミチューリン会の機関紙『伊那の農業』を題材として、ミチューリン会の主張の変化を追いながら、そうした農業技術運動と農民や科学者との関係を検討しようとするものです。今回の報告では、1950年代前半の運動が拡大していく時期の特徴が明らかにされました。

報告後の討論では、ミチューリン農法を受け入れた農家の地域性や階層性、畜産技術との関係、あるいは機関紙以外の史料の有無、今後の研究の方向性などについて議論しました。



飯田・下伊那で地域史研究に携わって

研究員 千葉 拓真

光陰矢のごとし、少年老い易く学成り難し、といった言葉がありますが、こうした言葉の重みを研究所に赴任してから今日までの間に、嫌というほど実感させられました。5年間はまさに矢のように過ぎていきました。しかし、その間に果たして私自身は「地域史」とはなにか、地域に住む人びとに歴史学は何ができるのか、ということは何処まで考え、実践に移すことが出来たのでしょうか。また歴史学を研究する中で、過去を生きた、あるいは今を生きている人びとの人生にどこまで肉薄することができたのでしょうか。これらの点については甚だ心許なく感じています。しかし、幸運なことに、飯田を去っても歴史博物館の学芸員という歴史研究やその普及に携わる仕事に就くことが出来ました。立場は違っても人間の過去と現在、そして未来に向き合おうとするこの営みを続けていけることに感謝し、次の場所でも頑張っていきたいと思っております。最後になりましたが、意志が弱く、優柔不断な自分が今日まで研究や仕事を続けることが出来たのは、市民の方々や研究所のスタッフ、そのほか多くの人びとの支えがあったからです。末筆ながら謝意を表したいと思います。ありがとうございました。

負の歴史に学んで

調査研究員 齊藤 俊江

15年間もの長い間、市史編纂室や歴史研究所の心温かい職員の皆様の中で、伊那谷の歴史をひもとくことができたことは私にとって最愛の職場でした。特に満洲移民や遊郭社会の研究は、歴史から葬りされようとしている方々から、私の人間としての追及や励ましをいただき、その研究を支えて下さったのは歴史研究所の存在でした。

私は萩の花が好きで家の周りにはいく株もあります。春になるとむくむくと芽をだし、1~2メートルも伸びて6月と9月に桃色の小さな花が咲き、ゆらゆら揺れて、冬には枯枝となります。満洲開拓で亡くなられた方や、遊廓で働いた女性たちは、萩の花に変わり、自分が犠牲になった分、美しい、明るい社会がくることを私に呼びかけてくれます。私はその呼びかけに添って今後も微力でも応じていきたいと思っております。



間に合った！「少年農兵隊」調査

原 英章 (歴史研究所調査研究員)

「ちょうどいい時にやってくれた。」「あと2、3年あとだったら、もうだめだったかもしれん。」

当研究所2月の定例研究会に参加された元少年農兵隊員のお年寄りの方々(80代後半)がおっしゃった言葉である。当日のテーマは「飯田下伊那にもあった少年農兵隊」であった。

「少年農兵隊」は、正式には「甲種食糧増産隊」といい、戦争末期の1944(昭和19)年、45(昭和20)年の2年間だけ国民学校高等科卒業の少年達(現在の中3)で編成された食糧増産のための組織である。長野県全体で44年には900名、45年には2100名であった。学校ごとに参加人数が割当てられ、主に農家の長男が先生から指名されて参加した。最初に約1か月の県全体での基礎訓練を受けた後に県下各地に出動し、出征農家への援農、水路づくり、開墾等を集団で行った。

飯田下伊那では、下伊那農学校や伊賀良農業会の稚蚕飼育所に寝泊りして、三尋石の開墾にもあたった。1年間で終了しその後は農業へ戻った者の他、満洲の報国農場へ行った者、次年度の農兵隊の指導にあたった者もいた。現在の中学3年生にあたる少年達が、「鍬の戦士」と讃えられ、軍隊並みの厳しい規律のもとに「お国のため」に駆り出されたのであった。45年の少年達は8月の終戦後も名称を変えて作業を続けたという。「手当10円」と明記されていたが、受け取った記憶のない人がほとんどだ。

全国的には調査もされ記録もあるが、飯田下伊那での調査はなされていなかった。私が飯田下伊那にも農兵隊に行った人たちがいることを知ったのも、他の調査で体験者からお話しをお聞きしたのが最初だった。手記などもあまり残されていない。なぜ残されていないのか考えてみると、満洲移民のような極限状態の体験ではなく、1年間だけの体験であったこと、戦後の混乱の中で毎日の生活そのものに追われていたことなどがあげられる。役場等の記録も旧千代村など一部に残されているだけである。(終戦直後に焼却された?)

定例研究会の様子が新聞報道されると、数人の体験者から連絡があり、当時の名簿を大切に保管されてきた方もいた。現在、記録をまとめることへの強い期待感を感じながら作業を進めている。もう少し早かったら、という歴史の調査が多い中で「間に合ってよかった」と思う調査である。

飯田・下伊那の歴史と景観 その8 「鼎の二股路地」



「山村絵図」



「Y」型路地



「Y」水路

松川の右岸に位置する鼎地区は、しばしば松川の氾濫に見舞われつつも、松川の水を利用しながら農地や集落が形づくられてきた地域である。江戸時代末期ころの松川流域の様子を描いた「山村絵図」(吉川美智子氏所蔵)には、飯田城が「御城山」と記され、「下橋場」(現鼎橋)を通過して城下町に向かう道と現在の下茶屋の十数軒の家々が並ぶ街並や松川と平行して流れる幾筋もの井水が描かれている。そこには松川から取水された井水が途中で幾度も「Y」型に分岐や合流をしながら、周辺の水田地帯を潤す様子が描かれ、水との関わりの深さを感じさせる。鼎下茶屋周辺では、現在も「Y」型に分岐する路地や水路が多く、耳を澄まして歩くと、そこかしこを流れる水路から聞こえてくる水音に気付かされる。(研究員 樋口 貴彦)

飯田アカデミア2018第83講座

遊廓社会史研究の射程 —近世～近代移行期を中心に—

講師 佐賀 朝さん (大阪市立大学大学院文学研究科教授)

会場 飯田市役所 C棟3階会議室 (飯田市大久保町2534)

受講料 500円 (資料代)

5月19日(土)

第1講 13:30～15:00

遊廓社会史研究の到達点—講義の課題と研究史上の諸論点—

第2講 15:20～16:50

居留地付き遊廓の比較社会史—横浜と大阪・東京—

5月20日(日)

第3講 10:00～11:30

芸娼妓解放令をめぐる諸問題—東京・京都・大阪と神奈川県ほか—

第4講 13:00～14:30

近代における遊廓社会史の諸問題 (仮題)

近世～近代の遊廓に関する研究は、1990年代以降、都市社会史の視点にもとづく研究が大きく進展してきました。本講座では、そうした研究を推進してきた流れの一つである遊廓社会史研究会の共同研究をふまえて、近世～近代の遊廓について論じます。

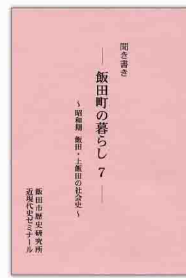
特に、幕末・維新期の遊廓について、大阪、東京、京都などの事例を中心に、居留地付き外国人向け遊廓の比較社会史や、芸娼妓解放令をめぐる諸問題の分析を進めます。

可能であれば、そうした研究をふまえて、第4講で飯田の二本松遊廓にも言及できればと思っています。

※1日のみ、1講義のみでもご参加いただけます。受講をご希望の方は歴史研究所までお申し込みください。当日参加も可能です。

新刊
案内

聞き書き『飯田町の暮らし』7
—大正昭和期・飯田町の社会史—



近現代史ゼミナール 編集
飯田市歴史研究所 発行

B5判 215頁
定価700円

本書は、歴史研究所の近現代史ゼミの研究成果です。

今回聞き書き収録できた中には、大宮通りの桜並木や車井戸の深さの調査、学校が工場になったこと、戦後食糧・燃料の確保や販売に奔走した青年時代、演劇研究会や映画鑑賞などが入りました。

戦争と戦後というかつてない激しい社会変動の時代を生きぬいてきた人々にとって、歴史とはどのような意味があったのか本書から考えたいものです。

聞き書き『飯田町の暮らし』
—大正昭和期・飯田町の社会史—

1・2・3・4・5・6巻

各500円 歴史研究所にて好評販売中!

旧飯田町で、大正末期から戦後を通して生活してきた方々の体験をお聞きし、当時の庶民の暮らしや都市空間を再現しました。ぜひ、手に取ってお読みください。

歴研ゼミ&ワークショップ 4月・5月の予定

受講生募集! スタッフとともに
歴史を学んでみませんか。

場所:歴史研究所 研修室

お知らせ

近世史ゼミは、しばらく休講いたします。再開につきましては決まり次第お知らせ致します。



近現代史ゼミ

4月14日・28日

5月12日・26日

10:00～11:40

担当:田中雅孝(調査研究員)

満州移民研究ゼミ

第80回 4月7日 10:00～11:40

第81回 5月12日 13:00～15:00

担当:本島和人(調査研究員)
齊藤俊江(調査研究員)

地域史(川路)ゼミ

4月11日・25日

5月9日・23日

18:30～20:40

会場:川路公民館2階視聴覚室
担当:羽田真也(研究員)

わが町の建築史ゼミ

※詳しい内容、日時は
歴史研究所まで、
お問い合わせください。

担当:樋口貴彦(研究員)

思想史ワークショップ

4月4日・18日

5月2日・16日

19:00～20:40

市民の皆さんが自主的に学び合う場

自分史ワークショップ

4月28日

5月26日

13:20～15:20

市民の皆さんが自主的に学び合う場

ゼミ・ワークショップの詳細につきましては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL0265-53-4670

開所時間:午前9時～午後5時 休所日:日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日